進歩的な病院に学ぶ医療の今日と明日

社会医療法人 河北医療財団理事長 河北博文氏 特別インタビュー

河北総合病院を核として、医療の地域内完結を目指す

社会医療法人河北医療財団（東京都杉並区、河北博文理事長）は7月1日、「河北総合病院」を新築移転した。24時間365日の救急診療を行う二次救急医療機関として、地域に欠かせない医療の提供に努めている。そこで、株式会社日本医療企画の林淳代表取締役が特別インタビュー。河北理事長は河北総合病院を核として、医療の地域内完結を目指すと決意を述べた。

河北博文
社会医療法人 河北医療財団　理事長

林　大都会東京の中にこれだけ緑豊かな河北総合病院の完成、誠におめでとうございます。まずは新病院建設の意義からお話しください。

河北　河北総合病院は、河北病院として1928年5月に開院しました。その後の改築を含めても65年以上経過した病院です。現在の河北総合病院の建て替えは長年にわたる重要課題となっていました。私自身、河北総合病院の建て替えに42年かけてきました。父恵文は1973年に亡くなりましたが、当時私は医学部の学生でした。この後10年間は大叔父が理事長として病院運営を担ってくれました。私は大学卒業後、米国シカゴ大学に留学。帰国後、その理事長が亡くなったこともあり1988年に理事長に就任。病院経営を担い、この病院の立て直しを考え始めました。帰国後すぐの83年は、後の日本医療機能評価機構となる組織を発足させようと考え始めた年でした。これは、医療機関について第三者による評価を実施し、より質の高い医療、安全な医療を提供するための支援を行うことを目的とした機構です。私は留学先で学んだ米国の事例を挙げ、いろいろな場面で説明を始めました。評価機構を立ち上げるにはモデルが必要でしたので、河北総合病院がモデル病院を担当し、米国の病院認定合同委員会（JCAH）から資料を数多く取り寄せたほか、東大の郡司教授、日本医大の岩崎教授にサーベイヤー（評価調査者）のトレーニングに参加してもらいました。95年に日本医療機能評価機構が発足した際、最初の評価項目を作ったベースが当院なのです。

新病院に必要な「医療の心」と「医療の力」

林　河北先生は、地域住民の生活支援を含めた病院経営の多角化に取り組まれております。地域あってこその医療です。地域としっかりと結びつき、地域に住んでいる人々をいかに支えるか。医療を含む総合的な視点で考えなくてはならない時代になってまいりました。今回の移転新築は、これからの病院経営の一つのモデルケースになると思います。

河北　新病院ができるまでに取り組んだことは、地域医療をどう考えるかです。まず、総合病院を生かすためにリハビリテーション病院を創りました。そして、家庭医療中心のクリニックを作り、療養型の病院や老人保健施設も整備しました。健診センターは杉並区高円寺のほうに移しましたが、建て替えに合わせて集約します。また、在宅医療は1981年から手掛けていますし、1948年には民間病院として初めてインターンを引き受け、後の研修医も引き受け医師の教育を行っています。また、71年には看護学校を設立し医療人材の育成も取り組んだほか、82年には、スリッパをそろえることから始めた職員研修にも力を入れています。こうして今、杉並区内に全ての医療機能をもつことができたのです。

林　病院というものは、「病（やまい）の院」であってはダメだというのが私の持論です。「病の院」から脱却して経営の多角化を打ち出し、総合的な人間の健康センターのような形に変わっていかないと病院は持たない、このように言い続けているところです。その意味で、「地域あっての医療」と言い続けていらっしゃることは素晴らしいことです。

河北　新しい病院に入れるべき大切なものが2つあります。それは、「医療の心」と「医療の力」です。このうち医療の力については比較的容易ですが、問題は前者です。医療の心を病院として備えることは本当に難しい。医療の心の基本は、患者さんに寄り添う医療です。ただし、寄り添う姿勢が問題です。無駄に寄り添うことは、今の時代の社会保障の中では許されません。ですから、医療リテラシー（医師と患者の間で相互に尊重し、信頼し、合意すること）をしっかりとつくり上げていくことが大切で